



佐賀大学農学部同窓会報 第9号

ありあけ

●発行日 2012年1月1日
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ <http://dousou.saga-u.ac.jp/>

平成23年度農学部同窓会通常総会・懇親会



農学部同窓会・会長（金丸安隆）



佐賀大学・学長（佛淵孝夫）



佐賀大学 管弦楽団



第26回（平成23年度）佐賀大学農学部同窓会通常総会が平成23年6月11日、農学部大講義室で開催さ

れました。来賓として大分県支部から衛藤靖之（S55年卒・育種）さんのご臨席を賜りました。熊本県

支部からもご臨席の予定でしたが、当日の大雨による交通事情で叶えられませんでした。

今回は佐賀県内各支部はじめ、近隣の福岡県、長崎県の同窓生諸氏約90名の出席がありました。総会は、金丸安隆（S43年卒・畜産）会長のあいさつ、物故者追悼の後、議長に石川富美夫（S48年卒・作物）を選出し、事務局から平成22年度事業・収支決算、平成23年度事業計画・収支予算などの報告、これに対する質疑応答、採決を経て承認されました。なお、詳細は次ページをご覧ください。

総会終了後には、佐賀大学 佛淵孝夫学長による「佐賀大学の今とこれから」と題する約一時間の講話を頂きました。ご専門の股関節治療の最前線、独立法人移行後の魅力ある佐賀大学運営、旧正門前への美術館創設構想などを静聴し、多くの質問もあり有意義でした。

その後、佐賀大学在校生のサークル「佐賀大学管弦楽団」6人による弦楽四重奏を楽しむことが出来ました。

総会終了後は学内の「かささぎホール」で懇親会を開催、佛淵学長はじめ本部及び各学部同窓会の来賓、同窓生諸氏約80人が参加されました。特に不知火寮歌「南に遠く」の巻頭言と歌、輪になって会場を踊る光景は圧巻で、学生歌「楠の葉の」の斉唱、最後は野口好啓（S41年卒・畜産）氏による来年の再会を祈念して、全てが盛会のうちに今年度の通常総会を閉じました。

総会後の講話、学生サークルの出演は今回が初めての企画でしたが、好評でしたので次回も実施される予定です。来年度の通常総会については後日通知されますので、今年以上の参加を願っています。



佐賀大学公開シンポジウム

平成23年6月11日、同窓会通常総会前の13～15時に農学部大講義室で「平成22年度佐賀大学農学部部局長裁量経費事業成果報告会、佐賀大学公開シンポジウム」が開催されました。大学関係者、同窓生、高校生や市民など約150名で会場は満席となる盛会でした。今回のメインテーマは「ゲノムパワーでできる 強くて優しい野菜たち」、3名の先生方の演題は次のとおりでした。

鈴木 章弘 （作物生態生理学分野・准教授）

一色 史郎 （蔬菜花卉園芸学分野・教授）

野瀬 昭博 （熱帯作物改良学分野・教授）

地球に優しい
マメ科作物を
つくる



野生植物を
使って新しい
ナスをつくる



雑草は何故
ストレスに強いのか？
- サステイナブルクロープ・
モデルを考える -



平成22年度事業報告及び収支決算

事業報告

次の事業を実施し、円滑な同窓会活動に努めました。

- (1) 大学と同窓会との意見交換会の開催。
- (2) 会報「ありあけ」6、7号を発行・配布。
- (3) 大学主催のキャリアデザイン講座や就職ガイダンスの講師として会員を派遣。
- (4) 農学部・全学同窓会支部への支援活動。

収支決算

- (1) 一般会計 (H22 4.1~H23 3.31) 単位:円

【収入の部】

科 目	22年度実績
前年度繰越金	1,516,231
会 費	4,409,000
学生(新入生)	3,366,000
一般会員	1,043,000
雑 収 入	67,885
特別会計戻入	0
計	5,993,116

【支出の部】

科 目	22年度実績
事 務 費	809,281
会 議 費	479,484
事 業 費	780,807
組織強化費	212,910
全学同窓会負担金	2,019,600
特別会計への繰出金	901,500
新入生入会金	76,500
会費平準化準備金	825,000
予 備 費	0
計	5,203,582

〔差引残〕

(収入) 5,993,116円 - (支出) 5,203,582円 =
789,534円 (次年度繰越金)

- (2) 特別会計 (H22 4.1~H23 3.31) 単位:円

【収入の部】

科 目	22年度実績
前年度繰越金	14,156,840
一般分 a	9,109,866
会費平準化準備金 b	5,046,974
入 会 金 c	76,500
会費平準化準備金 d	825,000
雑 収 入 e	7,871
計	15,066,211
一般分 (a + c + e)	9,189,751
会費平準化準備金 (b + d + e)	5,876,460

支出はなく全額次年度へ繰越

監査報告

平成22年度分の会計監査を実施したところ、会計諸帳簿及び証拠書類、預金通帳等いずれも適切に処理されていたことを認めます。

平成23年6月11日

監事 山口 郁夫

監事 溝口 善紀

平成23年度事業計画及び収支予算

事業計画

同窓会活動の活性化を図るため、会報の発行による情報提供や、意見交換会の開催など大学と連携した取組みを行います。

- (1) 会報「ありあけ」(8号、9号)の発行・配布。
- (2) 大学と同窓会との意見交換会の開催。
- (3) 同窓会支部活動に対する助成。
- (4) 農業技術経営管理士(農業版 MOT)養成の取組への協力支援。
- (5) 会員の住所等異動状況調査の実施。

収支予算

- (1) 一般会計 (H23 4.1~H24 3.31) 単位:円

【収入の部】

科 目	23年度予算
前年度繰越金	789,534
会 費	4,774,000
学生(新入生)	3,674,000
一般会員	1,100,000
雑 収 入	201,466
特別会計戻入	1,000,000
計	6,765,000

【支出の部】

科 目	23年度予算
事 務 費	1,017,000
会 議 費	580,000
事 業 費	1,300,000
組織強化費	520,000
全学同窓会負担金	2,204,400
特別会計への繰出金	983,500
学生入会金	83,500
会費平準化準備金	900,000
予 備 費	160,100
計	6,765,000

- (2) 特別会計 (H23 4.1~H24 3.31) 単位:円

【収入の部】

科 目	23年度予算
前年度繰越金	15,066,211
一般分 a	9,189,751
会費平準化準備金 b	5,876,460
入 会 金 c	83,500
会費平準化準備金 d	900,000
雑 収 入 e	3,289
計	16,053,000
一般分 (a + c + e)	9,276,540
会費平準化準備金 (b + d)	6,776,460

【支出の部】

科 目	23年度予算
繰 出 金	1,000,000

一般会計に繰り入れ

シリーズ⑦
研究室紹介

生物環境科学科 農業生産機械学研究室

本研究室は、農業土木学科の農業機械学研究室として誕生し、昭和40年から今に至るまで100名を超える卒業生を排出してきました。担当教員（官）については歴代の田中栄三郎先生、藤木徳実先生、松尾隆明先生、および稲葉繁樹先生に加え、本年度より岩手大学より広間達夫先生をお迎えしました。

途中、藤木徳実先生は九州大学から赴任され



広間先生

た内田進先生と生産システム情報学研究室を立ち上げられ、異なる研究室となりました。しかし、これら二つの研究室では共同で様々な研究に取り組みました。現在、この研究室は北垣浩志先生に引きつがれています。

農業生産機械学研究室では、田中栄三郎先生から松尾先生に至るまで、農業機械について

様々な研究を行っていました。その流れを引き継ぐように、現在においても広間先生においては土と車輪との関連性、稲葉先生においてはゴム履帯走行装置における振動解析などの農業車両関連のテーマについて研究を行っています。また、近年の情報機器の発達や農業を困む社会情勢から、農業における情報管理についても取り組みを行いつつあり、IT機器を駆使した麦やコメについての新たな品質分析法についても研究に取り組んでいます。研究室での教育では、従来から行われてきた機械・工具に関する実習に加え、最新機器による穀物の分析やIT関連



収穫作業中の稲葉先生と学生

の技術習得にも取り組んでいます。

平成23年度のメンバーは、教員2名・大学院生2名・学部生12名となっており、日々研鑽を積んでいます。



平成21年度 卒業式当日 生産システム情報学研究室とともに

会員の広場

静寂な自然と仏の国 ブータン

高木 胖 (S36年卒・育種)

佐賀大学にミカン亜科植物の膨大なコレクションがあるのをご存知でしょうか。信州大学はナシとリンゴ、岡山大学はオオムギ、横浜市立大学はコムギ、国立遺伝学研究所はイネ、それぞれに遺伝資源保存事業があり、佐賀大学農学部果樹園芸学研究室にはカンキツ類の野生種と栽培種を含む1科・2亜科・22属・339種、約700個体が保存されていて(佐賀大学植物遺伝資源 検索)、世界有数の規模です。

アジア大陸にインド大陸がぶつかって8,000m超級のヒマラヤ山脈ができ、亜熱帯に高さという環境ができ、多くの植物種が適応してきました。カンキツ類の遺伝資源の探索が松本亮司教授(果樹育種学)により組織され、2007年9月にブータンに行ってきました。



タクツァン僧院(パロ 3,070m)

タイのスワンナプーム空港を出発すると、ブルーを基調とした赤とオレンジに変化するアンダマン海を横切ってベンガル湾に入ります。バングラデシュは一面の大洪水です。木々と家とが連なっており、かろうじて「人の住む陸地」があることが判ります。ブータン航空(Druk Air)はゼット音を高く、低くしながらヒマラヤ山塊へ向かって進みます。山肌に接せんばかりになり、滑走路が見えたと思ったらパロ空港に到着です。

ブータン王国(Kingdom of Bhutan)は100mから7,500mの高さにあり、山また山、ここは中尾佐助の言う照葉樹林地帯であり(ヒマラヤ山麓~雲南~江南~台湾~日本)、四季のあるモンスーン気候、人の生活と仏教文化は日本の農村を思わせ、郷愁を誘います。

東部、タシガン県(Trashigang)にはブータン唯一の大学シェルブツェ・カレッジ(Royal University of Bhutan)があります。男子学生は民族衣装の「ゴ」を女子学生は「キラ」を着けており、日本の明治・大正の風景に似ています。この辺りは1,000mの高さで、木々が開けたところにレモンガラスと大麻草の群落を見ながら山を登ります。東部農業試験場カンマサブセンター(2,100m)に着いた頃に

は日は西に傾き、溪谷は赤橙色に染まり深い青のコントラストの中にあります。遠くに「川」が大きく蛇行して輝き山々が連なって、ブータンでも一番と言われる景色です。時は過ぎ山並みはさらに濃く暗くなり男女が歌を交わすであろう「歌垣」の雰囲気です。



ミカンの野生種

お寺さん(Dzong)には仏様がいて、巨木の森には木霊、祖霊、神霊がいて談笑しているかのような、夜は深い静けさの中にあります。

ブータンは九州と同じ広さであり約70万人が住み、人口の90%が自給的な農業を(農地率22%)国土の70%以上が森林です。冬から夏にかけてはオオムギ、春から秋はイネ、ジャガイモ、トウモロコシ、高地ではソバを作って、牛、そしてヤク牛を飼っています。土地が少ないことから女系社会が形成されていて女性の家に男性が通う「夜這い・妻問婚」が成立します。自家用の酒アラがあり(特殊な植物に着生する菌をたね麹とし、主にトウモロコシから作った蒸留酒)男女の区別なく飲みます。村の「よろず食べ物屋」では女主人が店の切り盛りをしており夫である男性は赤ん坊を背負って働いていました。稼ぎの悪い男性は簡単に戦力外通告を受けるとか、兄弟姉妹間で父親を異にするケースもあり「ブータンの作男」は昼も夜もマメに働いています。

遺伝資源の探索に関しては、小さな果実のカキとナシがジャングルにそして農家の庭にあり、「野生種?から栽培種に移行する」の多様な変化が見られました。収集した野生種はポンカンの一種であり種子がギッシリと詰まっています。遺伝資源は国の貴重な財産であることから簡単に国外に持ち出すことは出来ません。

ブータンは国民総生産(GNP)に代る国民総幸福量(GNH)の概念と、さまざまな環境政策、伝統文化保持に由来するスローライフがあり、「あなたは今幸せですか」の問いに対して90%以上が今の生活に満足していると答えています。日本は世界幸福度ランキングの90位にあり(ブータンは8位)、「幸せとは何なのか?」が問われることになります。



巨大な樹の下で

職場たより

同窓生諸氏がそれぞれの職場でご活躍されていますが、今回は水稲「さがびより」を育成された佐賀県農業試験研究センター作物部長 広田雄二氏からの寄稿です。

水稲「さがびより」の育成

佐賀県農業試験研究センターが稲の育種を開始したのは、昭和63年である。この頃は「コシヒカリ」のようなおいしい米でなければ売れないという時代であり、佐賀県全域で「コシヒカリ」の導入を試みたが、地力の高い平坦部では倒伏による収量、品質の不安定さは避けられなかった。そこで、佐大と共同で「短稈コシ」と呼ばれた「佐賀1号（商品名：ぴかいち）」を平成3年に世に送り出し、平坦部でも食味のよい米を栽培することを可能とした。

同じ頃、国の育種指定試験地である宮崎県農総試では、「コシヒカリ」を育種材料とし「ヒノヒカリ」を育成した。この「ヒノヒカリ」は「作り易さ」と「食味の良さ」で瞬間に九州全域で栽培され、佐賀県でも作付全体の半分を占めるまでに至った。

「さがびより」の交配は平成10年であり、この頃



たわわに実った「さがびより」

は中生の「ヒノヒカリ」の全盛期である。これまでも中生に育種目標として良質、多収、良食味を掲げ育種に取り組んできたが、「ヒノヒカリ」に替わるようなものは出てこなかった。早生や晩生では本県育成品種を奨励品種とすることが出来たが、中生では「ヒノヒカリ」という壁が大きく立ちはだかっていた。そこで「さがびより」については、「ヒノヒカリ」以上の収量、品質に加え、「コシヒカリ」のような粘りの強さと、粒が大きく味が良い「朝日」由来のおいしさを併せ持つ食味性を育種目標とした。

ところが、平成14年頃より「ヒノヒカリ」の収量、品質が低下し、その要因が地球温暖化による登熟期間の高温化によるところが大きいということが分かってきた。そこで、選抜に高温登熟性を加え、あえて慣行より1ヶ月早く移植を行い、出穂を早めることで登熟期間を高温とし、その条件下で収量、品質の低下が少ないものを選抜した。その結果、育成された「さがびより」は「ヒノヒカリ」より収量、品質に加え高温登熟性にも優れた。

「さがびより」は平成21年より奨励品種として県内1,520haで栽培が開始され、翌年は約3倍の4,360haに拡大した。初年目の作付面積は異例の広さであるが、その拡大も異例の速さであり、期待の大きさが窺えられる。平成21年はやや低温年であったため

収量、品質とも目標をほぼ達成できたが、翌22年は逆の例年になく高温年次となり、収量、品質の低下が懸念された。しかし、思った以上に収量、品質の低下は少なく、日本穀物検定協会による「米の食味ランキング」で“特A”という高い評価を得ることもでき、育成者の一人としてほっと胸をなでおろすことができた。

今後はこの“特A”を維持していくことが課題である。

広田 雄二（S58年卒・農学・熱作、S60・大学院・修士課程修了）

支部 だより

佐賀県支部の総会



農学部同窓会佐賀県支部は、5月26日に佐賀市内の「グランデはがくれ」において、平成23年度の総会を開催しました。当日は、会員88名のうち17名が参加し、来賓として農学部の藤田修二学部長、当会員で農学部同窓会の金丸安隆（S43卒・畜産）会長にご出席頂きました。

総会では、物故者への黙祷後、加々良光彦（S37卒・農業土木）支部長が挨拶を行い、来賓の藤田修二学部長と金丸安隆会長より、農学部及び同窓会の近況等についてお話を頂きました。事業、会計報告などに続いて、新入会員4名の紹介がありました。

懇親会は、宮原和夫（S28・保護）氏の乾杯の音頭により始まりました。出席者は、昭和28年卒の先輩から46年卒の我々青年まで、幅広い年代に亘り、大学の大きな変化や同窓会の動き、自分の近況などの話題で大いに盛り上がり、楽しい時間を過ごす事が出来ました。

佐賀県支部は、平成20年2月1日に発足したばかりであり、組織の強化を図るとともに、大学主催のシンポジウムや同窓会本部の総会などにも、積極的に参加できるよう努力したいと思います。

「我等の佐大」のため、皆で激しく頑張りましょう！

牛草 寛志（S46年卒・干拓水工）

佐賀県教職員支部定期総会開催について

平成23年度の佐賀県教職員支部定期総会を10月15日(土)、佐賀市の「グランデはがくれ」にて開催しま

した。

当日は会員21名が参加しました。また、来賓として、農学部同窓会本部の金丸安隆会長（元唐津南高校校長）にご出席いただき農学部同窓会の近況等についてお話をいただきました。その中で、佐賀大学に隣接した道路の拡張工事も終了したことから、正門の整備とあわせて美術館建設計画があるとの報告がありました。建設にあたっては同窓会員からも寄付を募ることから、是非とも協力をお願いしたいとの依頼がなされました。その後、水田和彦支部長（神埼清明高校長）のあいさつが行われ議事へと進みました。

議事では、事業報告、会計報告並びに監査報告がなされ問題なく承認されました。なお、役員については2年間の任期であったことから今年度の改選はありませんでした。

総会に引き続き開催した懇親会も和やかに開催することができました。参加いただいた金丸会長並びに会員のみなさま、ありがとうございました。今年残念ながら参加しただけなかった会員のみなさまにも、来年は是非参加していただきたいとの思いをこの紙面を借りお伝えし報告いたします。

佐賀県教職員支部 幹事長 大坪 正幸（S59年卒・農経）



佐賀県庁支部の総会開催

佐賀県庁支部では、9月2日に佐賀市内「グランデはがくれ」で平成23年度の総会を開催いたしました。参加者は41名（全会員217名）と、ちょっと少なかったのが残念でした。また、来賓として、農学部同窓会長の金丸安隆氏に出席いただき、佐賀大学での美術館建設計画など新たな動きについてのご報告をしていただきました。

平成23年度の新入会員は、鶴田裕美さん（工業技術センター）、仲原賢一さん（東松浦農業改良普及



センター) 山田祥子さん(環境センター) 田中温子さん(地球温暖化対策課)の4人です。

このところ、佐賀大学農学部出身者の入庁が少なくなってきました。県庁の採用者数も減少しているのですが、やはり採用試験での競争率が高くなってきているのが、原因の一つなのかと推察されます。しかし、その状況を潜り抜けて合格し、採用されたのですから優秀な方ばかりであると思われま。是非、これからの佐賀県のために頑張ってください。

総会終了後の懇親会では、お酒も強い方ばかりなので、数の少なさを吹き飛ばして、議論花盛りとなりました。この元気さと熱心さがあれば、まだまだ、佐賀県は大丈夫です。

佐賀県庁支部 副支部長 山口 誠治(52年卒・干拓)

熊本県庁支部

熊本県庁佐賀大学農学部同窓会の平成23年度総会を、7月22日に熊本ワシントンプラザホテルで行いました。大田黒慎一会長(50年卒・果樹)の挨拶の後、同窓会本部からご臨席いただいた金丸会長と白武教授に、同窓会本部の近況等を交えたご挨拶を頂きました。

会計・監査報告等の後役員改選があり、新会長のバトンを立場久雄(51年卒・作物)が受け継ぎ、副会長に高松孝之氏(52年卒・作物) 監事に小牧孝一氏(54年卒・応動) 事務局に坂本豊房氏(H10年卒・細胞)を選出しました。

会員は現職48名、OB16名の計64名ですが、当日は30名の出席があり、ホテルの看板となっている名物会場(三十三間堂)に収まることが出来ず、急遽1階レストランの貸し切りとなりました。

久しぶりの出会いに話が弾み、賑やかに焼酎を酌

み交わし、熊本の暑い夜が更けていきました。

立場 久雄(51年卒・作物)

福岡支部

佐賀大学同窓会福岡支部の平成23年度総会・懇親会が7月8日、福岡市天神「西鉄イン福岡」13F レストラン&バー・プロッソで開催された。同福岡支部は、佐賀大学卒業生なら出身学部を問わず誰でも参加でき、各学部から選出された役員で運営されている。福岡で勤務する卒業生にとっては、同支部そのものが「異業種交流の場」であり、しかも、年配の卒業生には企業等でも役どころで活躍されておられる方も多いために、若い層には人脈作りや情報の収集・交換の場として、非常に有益な場を提供している。

今回は、約100名の参加者があった。まず、定刻よりやや遅れて総会が始まり、主催者挨拶や年度の事業と会計報告等が堅苦しい雰囲気になされたあと、佐賀大学同窓会本部の宮島会長が佐賀大学全学同窓会の現状と課題、ならびに現在の佐賀大学の状況を説明した。また、招待参加した各学部の同窓会長等が紹介された。ここまでは、総会に意識を集中させるためかブラインドが下ろされて会議形式で進行された。しかし、総会が終了し懇親会に移る際に、壁面全面がガラス窓となった会場のブラインドが一斉に上げられるや、眼下にネオンで彩られた中州繁華街の眩い夜景と、博多港の灯り越しに遠く海の中道や能古の島の灯が瞬きが会場に飛び込んで、雰囲気は懇親会へと一転した。いかにも、福岡らしい洒落た演出であった。そのあと盛り上がったことは言うまでもない。福岡支部のご発展と会員各位のご健勝をお祈りします。

有馬 進(52年卒・農経・54・大学院・修士課程修了)



佐賀大学農学部と 同窓会との意見交換会

佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会が平成23年12月2日、佐賀大学・菱の実会館で開催されました。農学部から藤田学部長、和田副学部長、石丸学科長、白武学科長が、同窓会から金丸会長、杉町副会長、有馬副会長、森田佐賀県庁支部長、大坪佐賀県教職員支部副支部長、山田農業自営者の会会長、加々良佐賀県支部長、立場熊本県支部副支部長、緒方理事長、村岡会誌編集委員長が出席しました。

藤田学部長からは昭和24年から現在に至る60余年の佐賀大学農学部の経緯、今後の展開戦略と課題などの説明がありました。



農学部との意見交換会

これを受けて、農学部と農業高校と連携、勉学・スポーツ・社会活動などで活躍した学生への同窓会長表彰、全国からもその成果が目されている農業技術経営管理学(MOT)への継続支援、高齢者・障害者と農業との新たな連携展開への同窓会の支援など、今後に向けた意義ある意見交換が為されました。

佐賀県青春寮歌祭



今回で第19回目となる佐賀県青春寮歌祭が平成23年11月19日午後1時から、佐賀市交流センター「エスプラッツホール」で開催されました。

全国各地の北は北海道大学、南は鹿児島大学、更に戦前の台湾や朝鮮も含めて約30校の旧制高校、新制大学が母校の歩み、最近の活動を述べ、寮歌や校歌を披露しました。参加者は約300名、各校の県内在住者に加え近隣各県、遠くは東京からでした。また舞台上で歌い踊る方、会場から声援を送る方、卒業間もない若者から80歳を超えた万年青年まで、出で立ちは各校揃いの法被(はっぴ)や旧制高等学校当時の角帽・マント・高下駄スタイルなど、多種多様でした。

佐賀大学は旧制佐賀高等学校と一緒に、多くの卒業生諸氏に佐賀大学混声合唱団も加わり、学生歌「楠の葉の...」と不知火寮歌「南に遠く...」を熱唱し、



舞台狭しと踊りを披露しました。

「みんなで歌おう！」や旧制高校の段ではそれぞれの出身校を越えて、手を振り、肩を組み、高らかに歌い上げる80歳を超えた万年青年の心意気が舞台の若者や会場の聴衆を魅了しました。また、東京農業大学の「青山ほどり」では、立派な大根を両手に「大根おどり」があり、沢山の新鮮な大根が会場に配布されるなど、それぞれの旧制高校、新制大学の校歌、応援歌、寮歌には時代と地域の文化があり、心に残る交流の場でした。

全国各地で開催されてきた「旧制高校寮歌祭」が高齢化などで相次いで閉会される中、旧制高校・新制大学が共に集うこの寮歌祭は「佐賀方式」として全国から注目されています。伝統を継承し、新しい気風を注ぎ込む、この「佐賀青春寮歌祭」に是非参加されてはいかがでしょうか。

平成24年度は、11月17日(土)、今回同様の佐賀市交流センター「エスプラッツホール」で開催される予

定です。全体の事務局は、佐賀大学同窓会事務局
(電話0952 - 23 - 1253、FAX25 - 5700、

メール dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp) です。
村岡 実(S46年・植物保護、S50年卒・農学研究科修士課程)



みんなで歌おう



東京農大 大根踊り

佐賀の風景

稲こづみ
(昭和30年頃)



コンバイン
による収穫
(平成23年)



唐津くんち
(平成23年)



鏡山から望む
虹ノ松原
(平成23年)

編集後記

新しい年、2012年をお元気でお迎えのことと思います。昨年は3月11日の東日本大震災、東京電力福島原子力発電所事故、さらに世界各地の金融不安、所得格差への抗議デモ、TPP(環太平洋経済協定)参加対応など、後世に引き継がれると思われる「歴史の種」が芽生えた年であったとも云えそうです。

このような中で、多くの方が「絆」の大切さ、価値に目を向け始めました。人が生きるには衣・食・住に加え、支え合う「絆」もなくてはなりません。

佐賀大学農学部同窓会は、昭和28年卒業生から今年度まで、学舎を共にした約6,000人で構成される「絆」です。そしてこの同窓会誌「ありあけ」は、卒業生を縦横に結ぶ「絆」です。年2回、約10ペー

ジの誌面の制約の中ですが、これを基本として発行しています。

ただ、同窓会の諸活動は全て同窓生の会費で運営しており、会費未納者の方はこの主旨を今一度勘案されて、納入にご協力をお願いいたします。経費切迫のため、発行を1月、7月とし、未納者の方には今回を含め3年おきの送付とさせていただきます。

なお、会報「ありあけ」第9号に寄稿いただいた方々に、お礼申し上げます。

また、全国各地の同窓生の方々からの近況や地域の話などを会誌で紹介していきます。写真、報告、文芸(俳句、短歌、詩文)地域活動などお待ちしております。今回は、7月1日発行です。

今年が、幸多き日々でありますように祈念します。
編集担当(M.M)